

呼吸が切迫して、體を支えるものがなくて、膝頭がガク／＼した。

僕も憤怒の勢ひで黒石のところへ行つた。

新島が來てゐた。

細君や子供が吃驚してゐる。

『榮治よ、他人の世話なんか焼くな

人間の心がキサマ等に解るか。

死ぬ時は斯うするんだ』

僕は黒石の籐の寢台の上にて瞑目した。

『水が飲みたいかね、ダガバジ君』

黒石はオド／＼言つた。

『墨を持つて來い。紙と筆だ、障子紙でも好む』

黒石は大きい筆を買つて手習ひをしてゐた。

それで僕は黒石に、障子紙の上の端を持たせて、仰向けにねたまゝ、一字一字ユツクリと休み